

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	21229008	研究期間	平成21年度～平成25年度
研究課題名	T細胞分化を制御する転写因子ネットワークの解明	研究代表者 (所属・職) (平成26年3月現在)	谷内 一郎（理化学研究所・統合生命医科学研究センター・グループディレクター）

【平成24年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
<p>T細胞分化の転写制御を遺伝子改変マウスの手法を主体として研究し、胸腺内でのT細胞の分化制御機構に加えて、腸管内に存在するCD4⁺CD8$\alpha\alpha$⁺IEL細胞並びに皮膚に存在する$\gamma\delta$T細胞、さらに制御性T細胞の分化に関わる転写因子に関しても新たな知見を得つつある点は評価できる。加えて、当初の計画通りヘルパーを中心としたメインストリームT系列細胞全体の転写因子ネットワークの統合的解明を期待する。共同研究を含めると優れた研究成果が挙げられていると判断できるが、研究代表者が主体的に関わる研究成果での発表が少ない。遺伝子改変マウスの手法を主なアプローチとしているので、時間がかかるのは理解できるが、研究期間中の成果の発表が望まれる。</p>	

【平成26年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部上がらなかった。
A-	Thpok 遺伝子座のエンハンサー及びサイレンサーとエピジェネティック制御に関する研究は順調に進み論文としての発表も終えていることから、この点については期待どおりの成果が得られたと判断される。一方、転写因子ネットワークを解明する上で重要となる転写因子側の研究については、Bcl11b や SATB1 を同定するなど興味深い知見は得られているものの、論文発表には至っておらず、この点での成果は十分に上がっていない。